金を掘り川を掘る【其の1】

「時によりすぐれば民のなげきなり
八大竜王雨やめたまえ」

これは鎌倉幕府を開いた源頼朝の息子、三代将軍源実朝の和歌。

「八大竜王」とは、仏教思想で考えられた八頭の竜のことです。

今年の梅雨は七月末まで続きました。わが鹿児島県でも、宮之城・大口・吉松などの町は川内川が溢れ、大洪水の被害に遭いました。

実朝の生きた鎌倉時代からおよそ八百年経った現在でも、このように大雨による災害は絶えることがありません。

しかしながら、人々もあきらめていません。いつの時代も治水対策はその地域を治める者の重要な課題でした。

私たちの郷土には、忘れてはならない治水対策の歴史があります。その一つ、「新川掘り」あるいは「新川川筋直し」と呼ばれる河川改修についてお話してみましょう。

京セラホテル近くの参宮橋から下流を、地元の人は「新川」と呼んできました。

新川とはその名のとおり人工的に新しく作られた川の意味です。元禄十一年（一六九八）に模写された国分城下の古地図には野口辺りから大きく曲がりくねって流れる川の様子が描かれています。川は現在の国分シビックセンターから舞鶴中学校付近を通り、東南に向かい湊・下井へかけて流れていたようです。その付近を広瀬川と言っており、今も広瀬の地名が残っています。

府中・松木・福島・湊の小字を見ていくと、○川原、○古川、水流、中島などの川や岸辺、中州に関係のある地名が固まって見られます。これに色を塗っていけば、元の川の流れを推定することができます。また、集落は当時の河川に沿って点在しており、航空写真で見ればこれが一目で分ります。

この蛇行した川は大雨が降ると氾濫をくり返し、田畑を水浸しにしたり、人家を押し流したりして、人々を苦しめました。

そこで考えられたのが、氾濫をくりかえす元凶の蛇行した川をせき止め、新たにまっすぐな川を掘り、川水を海に流す方法でした。その経緯を『島津国史』が次のように記録しています。

「藩主光久が江戸に出る途中、国分に立ち寄った。その時、殿様は村人に困っていることはないか尋ねられた。村人は口をそろえて、毎年春と夏の境目に大津川が氾濫し、田畑は水没、家は壊され、困っていますと答えた。そこで光久は川水を引きなおし、南下させて大野原（現在の野口）を通す方法を考え、国分地頭を通して、家老島津久通に伝えさせた。そこで溝を掘り，堤防を築いて、大津川を大野原へ通し導いた。工事は四年かかって完成した。水は流れを変え、南下して住吉村に来て海に入った。水の害がなくなった。新川と名前を付けた。」

家老島津久通の系図（宮之城町郷土史）には、久通が新川改修の責任者に命じられたこと、川筋治しでできた田んぼが五千余石になったこと、また、久通は自ら「新河始末之記」を杉板に書いて、小村（現在の広瀬）の福庵寺に懸けたということが書かれています。もしこの始末記が残っていたら、新川掘りの工事の様子が詳しくわかったと思うと残念です。

川筋直しはどのような方法で行なわれたのか。次号は、これまでわかっていなかった川筋直しの詳しい工法について考えてみたいと思います。

文責＝藤

国分古地図